

われわれは何のために存在するのか？

自分は何をやりたいのか？

そもそも自分は何のために存在するのか？

我々の日々の営みはつまるところ、存在論的な問い掛けに行き着きます。

知とは何か？

知るとはどういうことかを探究するのが認識論であるとすれば、知識経営者は認識論と存在論の両方がベースとなって成り立ちます。

我々はなぜこの世に存在しているのか？

存在するとはどういうことか？

この究極的なテーマをひたすら追求した20世紀最大の思想家ハイデッカーは、時間の概念を軸に据え、「存在とは時間性を持つものである」と説きました。

通常、我々は時間とは川の流れるように客観的に存在し、過去・現在・未来と一方的に流れるものと考えがちです。

これに対し、時間とは自分自身の実存と関わりをもつ主観的なものであり、中でも最も重要な軸は未来があって、未来が過去を決定し、現在を生成するとハイデッカーは考えました。

つまり「自分はどようりたいのか」「どようりうるのか」という未来の可能性がみえてはじめて、過去に蓄積された知識やノウハウは意味を持つようになり、再構築される。

そして、未来と過去が一体となった時、現在(今ここ)の刻一刻の生き方がわかる。

過去が今を決めるのではなく、未来というものを置くことによって、過去が意味付けされ、今が決まる。

未来によって主導されてこそ、今というときが日々、生き生きと刻まれるのです。

<経営のヒント>

これは、新しい課題に直面した時、「こうありたい」という未来と意味付けされた過去が一体となって、今ここに対する生き方を後押しして、イノベーションが起きるのです。

ドラッカーは仕事とは、分析—統合(業務プロセス)—コントロール(フィードバック管理)の3つの論理(科学)で成り立っていると述べています。

しかし一番重要なことがあるのです！

まず、仕事を分析する前に、一番大切なことは何か？

最終成果を出発点に置くことです。

そもそも〜どようりたいのか？

なりたい未来をしっかりと明確にイメージすることです。

先日のCCL—MT第6講で「デザイン思考」を学びました。自分で自分の人生をどうデザインするか？

システム思考の考えの中でも、「ヒーロー物語」「犠牲者物語」そして「学習者物語」があります。

人それぞれがそれに無意識に自分の過去の体験から「同じ物語」を演出(デザイン)しているのですね。

だから大切なことは「未来の成功したイメージ」をしっかりとイメージすることなんですね。